

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月1日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720090

研究課題名（和文） 魔術的リアリズムの表象研究—ポストモダニズム、ポスト植民地主義、アメリカニズム

研究課題名（英文） Representation of Magical Realism: Postmodernism, Postcolonialism, Americanism

研究代表者

山口 和彦（YAMAGUCHI KAZUHIKO）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：20361214

研究成果の概要（和文）：「魔術的リアリズム」の言説をポストモダニズム、ポスト植民地主義、アメリカニズムとの関連で歴史化した。そうすることで、「魔術的リアリズム」が地理的・存在論的・政治的・文化的境界を、探求し、侵犯するのに適した語りの様式であること、ひいては近代化の過程を振り返り、(西洋)近代という準拠枠より大きな世界を指向する様式であること、魔術的リアリズム小説がさまざまな語りの様式と多様に関連する発展的なジャンルであることを示した。

研究成果の概要（英文）：This project historicizes the discourse of magical realism in relation to Postmodernism, Postcolonialism, and Americanism. In doing so, this project demonstrates that magical realism is an appropriate narrative mode for pursuing and invading geographical, ontological, political, and cultural borders, and that magical realist fiction points to a larger discursive arena than Western modernity, which is complicatedly related to various narrative genres.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：アメリカ文学・文化

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：魔術的リアリズム、ポストモダニズム、ポスト植民地主義、アメリカニズム

## 1. 研究開始当初の背景

人間の生のあり方に大きな疑問が投げられている今日の状況は西洋近代合理主義のひとつの帰結と考えられる。アカデミニズムにおいても、資本主義を基軸とする近代社会によって合理的なもの・可視的な世界が優先され、非合理的なもの・不可視のものが駆逐さ

れてきた過程がさまざまな視点から反省を促され続けている。近代によって合理的にしか思考できない「人間」が出現したのだとすれば、現況の突破口は近代的合理思考の外部にこそ見だされるということになる。このような視座から、近代合理主義のアンチテーゼとして「魔術的リアリズム」という文芸のジ

ジャンルあるいはモードを総合的・系統的に分析する研究はあまりなかった。

## 2. 研究の目的

「魔術的リアリズム」の言説を歴史化することで、「魔術的リアリズム」が地理的・存在論的・政治的・文化的境界を、探求し、侵犯するのに適した小説の様式であること、また近代化の過程を振り返り、人間が近代という準拠枠より大きな世界を指向するためのヒントを提示する文化の様式であることを具体的に示す。

## 3. 研究の方法

(1)「魔術的リアリズム」という用語の起源に立ち返り、「魔術的リアリズム」がもとより含意していた政治性をあきらかにする。そのうえで、(2)ポストモダニズム、(3)ポスト植民地主義、(4)アメリカニズムとの関連から、魔術的リアリズム小説のなかにその範例を見出し、「魔術的リアリズム」の言説を歴史化する。

## 4. 研究成果

(1) オクシモロンである「魔術的リアリズム」という用語は、「解消されることのない二律背反」を指し示すが、この二項対立自体は近代合理主義に依拠するものであった。「リアルなもの」は西洋的近代思考により理解可能な事象を指し、「魔術的なもの」は因果律の外部にあるものを指すのだとすれば、「魔術的リアリズム」という用語のなかにはあらかじめ西洋中心的視座が内包されている。その意味では、魔術的リアリズム小説は西洋近代に発祥した小説観を土台にしているといえる。実のところ、魔術的リアリズム小説は「あの世」や「別世界」を描くのではなく、「この世」の現象を描くという意味では因果律に基づく（あるいは因果律に異議申し立てをする）リアリズムの一変種と捉えられる。

しかし、魔術的リアリズム小説では「魔術的なもの」と「リアルなもの」との区別を判断する最終審級が提示されることはない。相反する複数のパースペクティブが同次元において提示され、一方のパースペクティブでは「魔術的なもの」がもう一方のパースペクティブでは「リアルなもの」となるような仕

掛けこそが魔術的リアリズム小説の語りの戦略の最たるものである。

そのような視点から（異論はあるが）「魔術的リアリズム」の起源（語源）は、ドイツの美術評論家のフランツ・ローに帰される。ローは、現実の神秘的・非物質的側面を表現することで「物自体」に潜在する魅力を再発見しようとする、あるいは現実の表層の背後にある生の謎を捉えようとする反動的な美術運動を「魔術的リアリズム」(Magischer Realismus [独]) と呼んだ。やがてポスト表現主義に合流することになるこの「魔術的リアリズム」は、「印象主義からは触知できる現実を引き出し、表現主義からは事物の世界の背後にある旺盛な精神性を引き出す」新しい絵画のジャンルとされた。

ローは「魔術的リアリズム」の画家を3つにグループ分けをしているが、魔術的リアリズム小説の展開を考える上でもっとも関連性が強いのは、より攻撃的で、社会批判的・革命的とされる、ドイツ北部と東部を中心に活躍したグループである（ローの絵画論は表立って政治的ではないが、潜在的にラディカルな政治批判を含んでいた。ローがナチの粛清の対象となり、数ヶ月間、強制収容所生活を送ったこと、釈放後も「墮落した芸術」を支援したかどで沈黙を強いられたことは偶然ではない）。なかでも代表的なのはオットー・ディックスとジョージ・グロスであり、「魔術的なもの」と「リアルなもの」を並置しながら、複数の現実を顕在化・可視化する彼らの絵画には確かな社会批判の種が宿されている。複数のパースペクティブから対象を捉え、それを世界の異様な有り様として平面上に一元的に表現することで一種の異化効果を発揮する手法は、後の魔術的リアリズム小説のアナロジーとも捉えられる。

(2) 19世紀終盤には、従来の小説が有していた一元的・普遍的パースペクティブに対する問題意識が高まっていた。それは、人間が意識や合理的思考をとおして「真実」あるいは「リアリティ」に到達することが可能なのかという知全般に対する認識論的転回を反映するものであり、人間の意識の脱中心化との問題系と繋がっていった。20世紀初頭の精神分析による、自己の内にながら統制不能な無意識の領域の発見は、自己存在の証明

としての「意識」や自律的な「人間」自身への信頼を根底から揺るがすものとなった。さらに合理的思考の果てにナチズムやスターリニズムが体现した妄想的狂気の世界が現実化したことは、合理的思考への信頼の墜落と同時に人間の認識能力や経験的現実の限界をあらわにした。そのような20世紀の「リアリティ・クライシス」は「現実」と「非現実」の転倒をもたらし、「非現実」と見なされていたものは、「現実」と同程度に根拠のあるもうひとつの「真実」と認識されるようになった。

この流れで、ポストモダンの認識論の転回と時を同じくして発生した魔術的リアリズム小説は、小説史の中心を担ってきたリアリズム小説のオルタナティブであった。小説のリアリズムが基本的に人間の現実に対する認識能力への信頼に依拠するのに対し、魔術的リアリズムは人間の想像力の限界や「リアリティ・クライシス」を超え、硬直化したリアリズムの不全的性質を補完しようとする。人間が知らない領域、人間が知らないことさえ知らない領域を、外部の領域としてでなく、世界内存在として提示することを魔術的リアリズムは目指す。その意味で、魔術的リアリズムは人間の現実観を拡大する小説の力への信頼に基いており、1960年代の「小説の死」の議論に対するアンチテーゼとしても機能した。「魔術的なもの」を「完全なる体系」と捉え、科学的な世界の体系よりも厳格は因果関係や独自の理論があると考え小説を創作した、20世紀最大の文学者にしてポストモダニズムの先駆者であるホルヘ・ルイス・ボルヘスがしばしば魔術的リアリズムの作家と目されるのも偶然ではない。

全体性を指向するパースペクティブのあり方を問う点において、また、脱領域的な「第三の空間」創出しようとする点においても、ポストモダニズムとの魔術的リアリズムとの親和性は高い。実のところ、脱本質主義を標榜するポストモダン作家たちは魔術的リアリズムの手法を選択し、原理主義、人種主義、民族主義、独裁主義、共産主義、植民地主義、帝国主義といった、出自・起源・同質性を前提としながら他者の価値観や文化、信仰体系などを抑圧するシステムや主義を問題化した。表象のなかに表象しえないものを提示するというポストモダニズム的逆説は、

「周縁」が「中心」を浸食し、支配的言説の揺らぎを創造する魔術的リアリズムのオクシモロンの性質のなかに典型的に見いだされる。

(3) 魔術的リアリズム小説は、ラテンアメリカをはじめ、かつて西洋列強の植民地であった地域において花開いた。西欧文化や西洋中心主義の世界観を離れ、被支配者の側に置かれてきた人々の世界観から現実世界を捉えなおすことにより、支配者のイデオロギーによって隠蔽されてきた社会的矛盾を明らかにする魔術的リアリズムの展開は、ポスト植民地主義の時流と密接な関係にある。

魔術的リアリズム小説の原テキストともいわれるアレホ・カルペンティエルの『この世の王国』(1949年)が、ラテンアメリカの起源を探求し、神話創造を試みる「反合理主義的文化ナショナリズム」と解釈されることは、魔術的リアリズム小説全般とポスト植民地主義の関連性を考えるうえでの範例となっている。カルペンティエルは人種的・民族的混交にもとづく諸文化の混交を、ラテンアメリカの「驚異的現実」を生み出す源泉とする。ラテンアメリカの歴史を「驚異的現実」の記録ととらえる「驚異的現実」論はカルペンティエルの魔術的リアリズムの中核を成す概念であり、アメリカ大陸全体が継承している共有財産であるとされ、ヨーロッパ中心主義的な価値体系に対置される。「驚異的現実」論はヨーロッパ近代中心の本質主義に対抗するものであるが、ラテンアメリカ諸国のヨーロッパからの文化的独立のイデオロギーがその背景にあるように、極めてナショナルで、それ自体が本質主義的な性質をもつものであった。その意味で、カルペンティエルの魔術的リアリズム小説、ひいては初期の魔術的リアリズム全般はポスト植民地主義的アイデンティティ・ポリティクスの実践であったといえる。

だからこそ、「合理的な」西洋に対し「非合理的な」アメリカを二項対立的に対置するカルペンティエルの魔術的リアリズム小説は、(戦略的な本質主義ではなく)ヨーロッパ中心の啓蒙思想や植民地主義の観点を反復強化するものとして批判の対象ともなった。この欠点を補い、ポスト植民地主義のための語りの様式として魔術的リアリズムを国際的

基準にまで高めたのがガルシア＝マルケスの『百年の孤独』(1967年)であった。ガルシア＝マルケスが導入した「共同体のパースペクティブ」は、特定のパースペクティブ(ヨーロッパ中心主義にせよ、ラテンアメリカの土着主義にせよ)を相対化するだけでなく、自らのパースペクティブを最終的に脱構築する。そこでは固定化した歴史(正史)観の脱構築が企図されると同時に、歴史として表現されなかった出来事の歴史化が企図されている。ガルシア＝マルケスの魔術的リアリズムで志向されているのは、政治的に代表されていない者、文化的に周縁化された者の声を表現することなのだが、その方法はリアリズム的な歴史表象(直線的な歴史語り)ではなく、現実や歴史がいかにかに操作、捏造されるのか省察し、事実が歴史から抹消される仕組み自体を物語化するようなメタ歴史的小説の方法であった。植民地主義の時代の小説の支配的モードがリアリズムであったとすれば、ポスト植民地主義の時代の支配的モードが魔術的リアリズムに移行したことを『百年の孤独』は例証している。

実のところ、20世紀後半における世界的な脱植民地運動の気運に乗り、魔術的リアリズム小説は世界各地で実践され、世界文学のなかで重要な位置を占めるようになった。

(4) アメリカ合衆国においては、魔術的リアリズム小説は主にマイノリティ作家たちによって実践されてきたといえる。その代表格がトニ・モリスンである。モリスンは魔術的リアリズムの手法を用いて、アフリカ系アメリカ人の失われた文化記憶を創造し、アフリカ系の共同体意識の再構築を試みた。その際、問題化されるのは WASP 中心の支配的なアメリカ文化のイデオロギーであると同時に、アフリカ系アメリカ人共同体を含めた支配の構造としてのアメリカニズムであった。モリスンは、アメリカ合衆国において二重に周縁化されてきたアフリカ系アメリカ人女性のパースペクティブから歴史を語り直すことを試みたが、そうすることで他の(さらに周縁化された)パースペクティブを自らが周縁化してしまうというジレンマに意識的である。代表作『ビラヴド』(1987年)はひとつのヒエラルキー(例えばヨーロッパ中心主義)を別のヒエラルキー(アフリカニズム)

に代替させるのではなく、ジェンダー、セクシャリティ、人種などで分けられた社会において人間はいかに自由になれるのかを追究する作品である。アフリカ系だけではなく、ネイティブ、アジア系、チカーノ/チカーナなどの人種的マイノリティ、さらには女性、同性愛者などの性的マイノリティや階級的弱者を代表する作家たちがモリスンの問題意識を共有し、魔術的リアリズムの手法で小説を手がけている。

魔術的リアリズムとアメリカニズムの関連においては、20世紀中葉における「アメリカン・ロマンス」の言説の存在を無視できない。19世紀中葉のアメリカン・ルネサンスの文学をアメリカ文学史の中心に据える「アメリカン・ロマンス」の言説は正統的なアメリカ文学とは何かを通史的に定義する機能を担った。それは、必然的に、ヨーロッパ的な文化伝統から自己を切り離し、アメリカ合衆国の文化の特殊性・独自性を前景化しながら、一貫したアメリカの過去や歴史を創造するものであった。その点において、「アメリカン・ロマンス」の言説はカルペンティエルらのラテンアメリカニズムの言説と軌を一にしている。

しかし、「アメリカン・ロマンス」の言説は、ラテンアメリカの魔術的リアリズムと合衆国の魔術的リアリズムを同根ととらえるというよりも、むしろ19世紀中葉のアメリカン・ロマンスの異形あるいは発展形としての合衆国の魔術的リアリズム観を提示したといえる。事実、それは「アメリカン・ロマンス」のラテンアメリカの魔術的リアリズムへの影響を指摘しつつ、フォークナーをはじめとする南部文学が合衆国の文学の伝統を豊穡にただけでなく、ラテンアメリカ文学の創造に決定的な役割を果たしたという、世界文化の中心としてのアメリカニズムの主張と密接につながっている。

その一方で、アメリカニズムは、アメリカ合衆国(とりわけ南部)とラテンアメリカの政治的・経済的・文化的風土の共通性を指摘しながら、国家や民族を超越する汎アメリカ的な文学、アメリカ大陸全体の文学の概念化するような文学史の地政学的転換を要求するものでもある。そのなかで、魔術的リアリズムは、ナショナルな文学史ではなく、全体としてのアメリカ大陸の文学史、さらには全

体としてのアメリカの歴史、文化、言説を考える上での鍵概念のひとつとなった。

魔術的リアリズム研究は、長い間その定義の袋小路から抜け出せなかったといえる。その一方で、地理的・存在論的・政治的・文化的境界など、さまざまな境界を、探求し、侵犯する様式である魔術的リアリズムは、小説ジャンルでは、クイア・ナラティブ、ホロコースト・ナラティブ、ロード・ナラティブなど、さまざまな語りの様式との関連が指摘され、その多様性と可能性の広がりが示されてきた。最近ではオイル・ナラティブとの関連が興味深い研究テーマとして挙げられるが、今後はさらにこのような他の語りの様式との相互関連性を歴史化する研究が求められるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 山口和彦、Confronting the Grand Narrative: Spatiality, Violence, and the Bio-Power in Haruki Murakami's Fiction、東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I、査読無、63 集、2012 年、P109-118. (<http://hdl.handle.net/2309/125468>)
- ② 山口和彦、Herblock×Nixon、英学論考、査読無、38 号、2009、P55-66.

[学会発表] (計3件)

- ① 山口和彦、ジョン・バース『酔いどれ草の仲買人』における無垢(イノセンス)の表象、サウンディングズ英語英米文学会、2011 年 5 月 14 日、上智大学 (東京都)
- ② 山口和彦、Confronting the National History in the Post-Cold War Context: “Heterogeneous Space” in Haruki Murakami's Fiction, American Comparative Literature Association, 2010 年 4 月 2 日、Monteleone Hotel (New Orleans, USA)

- ③ 山口和彦、Robert Coover の *The Public Burning* における戯画的想像力、日本アメリカ文学会第 48 回全国大会、2009 年 10 月 10 日、秋田大学 (秋田県)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山口 和彦 (YAMAGUCHI KAZUHIKO)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：20361214